

当館の収蔵資料の柱として、古墳時代を中心とする鉄製品と古人骨があげられる。

古墳時代の南九州独自の墓制である地下式横穴墓は、地下に設けた素掘りの空洞（玄室）に遺体や副葬品を埋葬し玄室の入口部を閉塞する。空洞のままに残された玄室からは、非常に良好な保存状態の鉄製品や人骨が出土することで知られる。鉄製の武器や武具、馬具や農具などは、錆膨れすることなく当時の形状や厚みを保ち、表面に残された繊維や皮革等の観察を含め、製作技法や使用状況の復元に多くの情報をもたらすものが少なくない。中には、表面を覆った薄い錆の下に、1,500年前の妖しい輝きを宿している刀剣類も見られる。こうした貴重な鉄製品も、出土後の保存処理と保管環境如何によっては、資料と情報の滅失の危険性がある。当館では、温湿度を管理した鉄製品専用収蔵庫を設け、現在までに5,000点近い資料を収蔵している。また、独自の保存処理体制と機器類を揃え、保存処理とX線撮影、データベース登録等の資料化を進めている。

古人骨は、鉄製品と同様に当館の重要な資料群を形成するものである。遺構や遺物といった遺されたモノを通して人間と歴史にアプローチする考古資料に対し、古人骨資料は過去に生きた人々にダイレクトに迫り得るものである。地下式横穴墓からは非常に良好な遺存状態で古人骨が出土し、その数は県内で600体を超える。これほど大量の古墳時代人骨資料が出土しているのは全国唯一であり、考古学のみならず人類学研究においても重要かつ不可欠な資料群と言える。専用の収蔵庫に保管しつつ、個体及び部位識別、クリーニング、各種計測及びデータベース登録を進めている。



「たんこう」



「酒元の上6-2号」



「甲に残るウジ虫サナギ」

「蛆サナギ痕の付着する地下式横穴墓出土の短甲」

西都原4号地下式横穴墓からは、3領の鉄製短甲が出土している。そのうちの1領に、珍しい数の「あるモノ」が付着していた。

短甲の右脇の部分に米粒状の痕跡が見られ、個別に観察すると幾筋もの縞模様が確認された。それは蛆のサナギが錆に取り込まれた痕であった。

当館で収蔵している鉄製品について調べたところ、他に数遺跡の地下式横穴墓から蛆サナギ痕の付着した刀剣や鉄鏃が確認された。なぜ、密閉された地下空間である地下式横穴墓の玄室に副葬された鉄製品に蛆サナギが付着したのか。

『日本書紀』巻第一、神代上には、黄泉竈食（黄泉戸喫ーヨモツヘグイ）の件が記されている。亡き妻に逢うため黄泉の国へ赴いた伊弉諾尊（イザナギノミコト）が、膿沸

虫流（ウミワキウジタカル）状態の伊弉冊尊（イザナミノミコト）の遺体を見するというものである。驚いた伊弉諾尊は、必死の思いで逃げ戻り、穢れた我が身を悔い「筑紫の日向の小戸の橘の櫛原」で祓ぎを行うのである。現在も神道の祝詞の中に詠まれるこの地は、現宮崎市の阿波岐ヶ原と考えられている。

地下式横穴墓から出土した鉄製品に、多くの蛆サナギ痕が付着している様は、まさに伊弉諾尊が覗き見た情景が、漆黒の玄室の中にあつたということを物語っている。

こうした資料は、単に「珍奇」なモノとしてではなく、地下式横穴墓に埋葬された遺体の腐乱、副葬品とし

こうした資料は、単に「珍奇」なモノとしてではなく、地下式横穴墓に埋葬された遺体の腐乱、副葬品としての鉄製品の錆化、蛆の孵卵から蛹化などいくつかの事象が重なったものとして、葬送儀礼やその時間的経過に迫り得る資料として貴重である。

東憲章